

対のある自動詞・他動詞の習得研究の 動向と今後の課題

中 石 ゆうこ
(2003年9月30日受理)

A Review of and Perspective on Studies in the Acquisition of Japanese
Transitive-Intransitive Verb Pairs

Yuko Nakaishi

The problem of the acquisition of transitive-intransitive verb pairs is still in controversy in spite of many teachers' and researchers' interests.

The first half of this paper reviews the theoretical background of Japanese transitive-intransitive verb pairs and summarizes their morphological, syntactic, and semantic frameworks.

The second half reviews the acquisition studies of Japanese transitive-intransitive verb pairs and argues what kind of research is needed now.

The findings are as follows:

- 1) It is not clear what the researchers intend by the term "transitive-intransitive verb pairs".
- 2) There are few studies that focus on the lexical features of verbs.
- 3) More introspective methods are needed in the studies.
- 4) There are few studies that have production data of learners.

Given these findings, I aim to promote the acquisition studies of Japanese transitive-intransitive verb pairs that can contribute to language pedagogy.

Key words: transitive-intransitive verb pairs, lexical features, introspective method, production data

キーワード：対のある自動詞・他動詞，語彙的特徴，内省的手法，運用データ

第1節 はじめに

日本語では，例えば「割れる（自動詞）－割る（他動詞）」，「建つ（自動詞）－建てる（他動詞）」のようによく似た形態で意味的に近似した自動詞，他動詞が表し分けられることがある。

対のある自動詞，他動詞は日本語教育においては概して初級レベルの教科書で提示される項目である。しかし，学習者にとって使い分けが難しいとされており（長沢1995，小林1996，小林・直井1996，市川1997），実際，上級レベルの学習者であっても誤用が目立つ。

- (1) (発表の前に) それでは，始まります。
- (2) 良いアイデアが浮かべない。

- (3) (ゼミの日程調整のとき)

月曜日は集めませんね。

(いずれも中国語母語話者・上級)

ある文法項目の習得を困難にしている要因を探るためには，習得を困難にしている要因を言語に求めるだけでなく，言語規則の内在化の際に学習者が取るメカニズムに求める視点もまた必要である。

日本語の自動詞，他動詞の習得に関しても日本語学習者にとって目標言語である日本語での自動詞，他動詞の使用状況を明らかにすることと同時に，日本語学習者による対のある自動詞，他動詞の習得がどのような様相をなすのかを明らかにすることが必要になる。

前者の解明を目指した日本語での自動詞，他動詞の

使用状況に関する記述的研究は日本語学分野において比較的早い時期から研究が進められている。

一方、後者の解明を目指した習得に関する研究の歴史はまだ浅い。その成立背景を見ると、Corder (1967) が誤用の有用性、体系性を指摘したことを発端に、Selinker (1972) によって学習者言語を目標言語でもなく、第一言語でもない、独自の言語とする「中間言語 (interlanguage)」という概念が提唱された1970年代以降、この体系だった一言語の様相の記述を行うことが学習者の言語の発達に即した言語教育への貢献に繋がるという確信が持たれ、その確信のもとに、多くの中間言語研究 (第二言語習得研究) が行われるようになった。そして現在では、中間言語研究は、第二言語学習者の産出した言語資料の研究、それぞれの過程の変化自体の研究ではなく、そこに現れた学習者の持つ言語体系を探ることであることが示されている (迫田 1998: 6)。

日本語の自他動詞の習得に関しても、従来の日本語学分野における自他動詞の使用状況に学習者の実際の使用が符合するかという観点で正誤を決める二元論的習得研究ではなく、学習者に内在する仮説の総体である学習者独自の言語体系の存在を認め、その様相をさまざまなデータをもとに探ることが必要になる。

そこで、本研究では中間言語研究の立場で日本語学習者による対のある自動詞、他動詞の習得に関する先行研究を概観した上で、今後このテーマに関する研究がどのように補充され進展していくべきか、その方向を示したい。

第2節 日本語の自動詞・他動詞に関する文法研究

2.1. 自動詞・他動詞とは

本節では、目標言語としての日本語の自動詞、他動詞の使用状況に関する記述を概観したい。

日本語の自動詞、他動詞は比較的早い時期から様々な観点をもって研究されてきた。その際の前提として、「自動詞」、「他動詞」と範疇化される動詞語彙の集合体が存在するという認識がある。

日本語の自動詞、他動詞の認定にあたっては、それぞれのラベル付けが行える動詞に共通する特徴が見いだされ、それをもとに範疇化が行われているわけであるが、それらの特徴は大きく分けて、形態的特徴、統語的特徴、意味的特徴とすることができる。

2.2. 自動詞・他動詞の形態的特徴

動詞全般を二分する概念である自動詞、他動詞を区

別する形態的な目印は存在しない。

「割れる-割る」の「war-」、「建つ-建てる」の「tat-」のように共通する語幹を持つ動詞対に関しては、「す」で終わる動詞は他動詞的、「る」で終わる動詞は自動詞的であるという指摘がある (佐久間1936) が、この場合でも「切る」(他動詞)、「閉める」(他動詞)のように指摘に合わない動詞が存在する。

自動詞、他動詞は形態を見ただけでは完全に区別することができないので、学習者にとっては学習上困難な項目であることが予測される。

2.3. 自動詞・他動詞の統語的特徴

山田 (1922) で既に述べられているように、統語的な特徴に関しては必須補語の数が重要な要素となっている。一般に自動詞は主格のみで必須補語を要求しないが、他動詞は必須補語を一項、二項と要求する。

(自動詞文)	N 1が	V i
(他動詞文)	N 1が	N 2を (に) V t
	N 1が	N 2に N 3を V t

しかし必須補語の数に関しては、会話では往々にして必須補語が省略され、また何が必須補語なのか明白ではない場合がある、という問題がある。学習者にとって、統語的区別を行うには辞書などの助けが必要になることが予想される。

2.4. 自動詞・他動詞の意味的特徴

最後に意味的な特徴に関してであるが、本居 (1828) を引き継ぎ、一般に自動詞は「自らの力で成立する事象」、他動詞は「他に働きかけて成立する事象」であるとされる。これは必須補語の数とも相関し、また多くの言語に共通する意味的な特徴である。

宮島 (1972)、西尾 (1982)、早津 (1987a, 1987b, 1989a, 1989b) などでは、これに加えて共通する語幹を持つ動詞対に関しては、自動詞が「他者の働きかけの結果」を表すことが示されている。つまり、共通する語幹を持つ動詞対に限っては、「他に働きかけて成立する事象」であっても他動詞で表されるばかりではなく、「働きかけ」に注目する場合は他動詞、「働きかけの結果」に注目する場合は自動詞で表すという役割分担があるということである。

学習者は、共通する語幹を持つ動詞対の場合、「自らの力で成立する事象=自動詞」、「他に働きかけて成立する事象=他動詞」という一対一の形で対応をなしていた規則を変更せざるを得ないことになり、習得が困難であることが予測される。

2.5. 日本語の自動詞・他動詞の下位分類

多くの先行研究で対のある自他動詞はその形態的、統語的、意味の特徴から下位分類される。その代表的な分類としては、寺村(1982)の相対自動詞、相対他動詞と絶対自動詞、絶対他動詞と両用動詞の対立、あるいは早津(1987a, 1987b, 1989a, 1989b)の有対自動詞、有対他動詞と無対自動詞、無対他動詞の対立がある。

その中で本研究に必要な概念としては、対応関係にある自動詞、他動詞を指す寺村(1982)の相対自動詞、相対他動詞と、早津(1987a, 1987b, 1989a, 1989b)の有対自動詞、有対他動詞が挙げられよう。

まず、相対自動詞、相対他動詞(寺村 1982)とは「割れる－割る」の「war-」、「建つ－建てる」の「tat-」のように、語幹を共有する形態的ペアを持つ自動詞、他動詞を指す。

有対自動詞、有対他動詞(早津, 1987a, 1987b, 1989a, 1989b)は、ある自動詞、他動詞が形態的にのみではなく、意味的、統語的にも対応することを指した概念である。

早津(1987a, 1987b, 1989a, 1989b)によれば「統語的に対応する」とは、奥津(1967)を踏襲し、以下のように表される。

(自動詞文)	N 2 が	V i
(他動詞文)	N 1 が N 2 を (に)	V t

他動詞文の目的格(N 2)が自動詞文で主格(N 2)の位置に現れる関係にある。Nは名詞句(名詞節)をVは動詞を表す。

「意味的に対応する」とは、同一場面を自動詞文、他動詞文でも表すことができることをいう。例えば、少年が投げたボールが窓に当たり割れてしまったような出来事を、以下のように二つの動詞文で表現することができる。

(自動詞文)	窓が割れた。
(他動詞文)	少年が窓を割った。

この時、「割れる－割る」は意味的に対応するとされる。

形態的に対応し、構文的対応、意味的対応をなさないことから、相対自他動詞に分類される自他動詞が有対自他動詞に分類されない場合がある。西尾(1978: 179-183)では、「秋から冬にかけて(*かかって)晴れた日が多い」で「かける」が本動詞としてではなく

副詞的に用いられるように、品詞性に変化が生じ普通の動詞とは言えなくなった場合、また、「鼻にかかる」「鼻にかける」が意味的に近似した事象を表さないように、慣用句的に固定した用法では自動詞、他動詞が統語的、意味的に対応しないことが指摘されている。

実際に対のある自動詞、他動詞の統語的、意味的対応を見てみると、品詞性に変化が生じた用法でも、慣用句的に固定した用法でもないのに、自動詞、他動詞が対応していないものがある。例えば、「抜く－抜ける」の対応をなす動詞対であっても、「亀がウサギを抜く」は「*ウサギが抜ける」と対応しない。同様に「切れる－切る」の対応では「庭の木を切った」は「*木が切れた」とは対応しない¹⁾。

このように、自動詞、他動詞の統語的、意味的対応は複雑な様相を示しており、その習得には言語的な困難点が様々な要因として関わっていると予想される。

ここで、日本語教育の現場での自動詞、他動詞の扱いを見てみると、『みんなの日本語II』、『Situational Functional Japanese vol.2 Notes』、『新文化初級日本語II』などの初級教科書には自動詞他動詞の対応表が示されている。この表で提示される対のある自動詞、他動詞は、動詞語彙のみで対応を提示している場合とそれらの語彙を使った例文を併記している場合とがある。

日本語教科書にはこれらの相対自他動詞対あるいは有対自他動詞対に含まれる自他動詞対に加えて、語幹を共有していない「入る(hairu)－入れる(ireru)」、「出る(deru)－出す(dasu)」を含めることが多いようである。

以上のように、自動詞、他動詞の下位分類には様々なものがあるので、学習者の習得状況を研究するに当たっては、調査対象となる自動詞、他動詞の範疇を明示し、混乱を避けなければならない²⁾。

第3節 日本語の自動詞・他動詞に関する習得研究と今後の課題

日本語の自動詞、他動詞の習得に関する研究の目的は、学習者の誤用の記述(市川1997)、学習者の中間言語の記述(小林1996, 田中1999)、言語理論の立証(岩崎1999, 松本1999, Hirakawa 2001)の三つに分けられる。

本研究では、第1節で述べたように、学習者の中間言語の記述を目指したものを分析の対象とする。以下に、本研究で分析した先行研究を表にまとめて示す。

表 1. 第二言語習得研究の観点による自動詞・他動詞の習得に関する先行研究

研究	対象	研究課題	方法	結果
岡崎・張(1998)	初級, 中級, 上級, 超級 JFL/JSL 中国語71名	中国語話者の動目構造に関する意識の程度差や「賓語」のタイプの違いが, 日本語の自動詞・他動詞の使用に影響を及ぼすのか	中国語文の文法の分析 (「賓語」のタイプによる違い, 中国語の動目構造に関する意識の違い) 日本語訳 自動詞の困難さに関するインタビュ	(1) 日本語の自・他動詞の助詞と動詞の組み合わせが正しくできるかどうかは, 「賓語」のタイプ, 意識のされ方と相関関係がない。 (2) 動目構造の干渉が見られる。 (3) 学習期間と自動詞の正用には正の相関がある。 (4) 自他の習得の困難さには漢字の影響がある。 (5) 学習者の内にある統語(形式), 意味(意義)とそぐわない用法があることが自他の習得を困難にしている。
小林(1996)	中上級JSL (600-700時間の学習歴) 様々な母語話者26名 (課題によっては68名)	中上級学習者の対のある自動詞の習得状況はどうか どうなっているのか	空欄補充 (短文での自動詞, 複文での自動詞) 多肢選択(文脈に適切な日本語の表現) 比較群として日本語母語話者による自由記述(文脈に適切な日本語の表現)	(1) 語彙と活用がかなり習得されているにもかかわらず, 自動詞の適切さに問題がある。 (2) 中国語話者, スペイン語話者に他動詞選択(アケル)が目立つ。韓国語話者でも他動詞(アケル), 他動詞の受身(アケラレル)の選択が目立つ。
小林・直井(1996)	初級JFL スペイン語2-7名	自動詞構文がどのように習得されていくのか	空欄補充 (助詞・自動詞, 動詞のテイル形, 動詞, 活用) 多肢選択(文脈に適切な日本語の表現) 比較群としてスペイン語母語話者による自由記述(文脈に適切な日本語の表現)	(1) 自動詞教授直後の学習者よりもそれ以降の学習者の方が多肢選択で受け入れられない答え(アケル)を多く選んでいた。 (2) ディスコースの中でヴォイスの適切な使い分けをすること, 結果の状況を表す自動詞構文を適用することが難しい。
田中(1999)	初級, 中級, 上級, 超級 学習環境は不明 中国語30名 韓国語30名 英語30名	受身表現に関して, 学習者はどの程度モニターを働かせているのか	OPIの発語資料の分析	学習者によって自己修正されるのは, 能動文・受動文間と自動詞・他動詞間である。
都築(2001)	上級JSL 中国語9名 中国語以外5名	(1) 自動詞の可能形と終止形に関わる誤用には母語干渉以外の要因は考えられないか (2) 中国語母語話者以外の日本語学習者にも同様の誤用が見られないか	空欄補充 フォローアップインタビュー	(1) 自動詞の可能形と終止形に関わる誤用は中国語話者以外の学習者にも見られた。 (2) 誤用の原因は, 母語の干渉だけではなく, 学習者が習得の過程で身につけた文法ルールから判断した結果である場合があった。
西限(2003)	中級JSL 中国語3名 韓国語3名 タイ語3名 ミャンマー語2名 ベトナム語1名	自動詞・他動詞の区別, 使用の困難さはどうなっており, それは学習者にどう意識されているのか	文法性判断 確信度スケール (判断の確信度の内省)	(1) 正文を正文と判断する方が誤文を誤文と判断するよりやさしい。 (2) 正判断率が高いものほど確信度が高い。 (3) 正判断者の確信度は誤判断者の確信度より高い。 (4) 自動詞を含む文の判断の確信度は低い。
守屋(1994)	初級, 中級前半程度JSL 中国語60名 韓国語49名 英語21名	自動詞の習得の難しさは日本語の自動詞のどのような用法上の特徴(使い分けの条件)に由来しているのか	空欄補充 (助詞・自動詞, 他動詞の選択) フォローアップインタビュー	中国語話者, 英語話者にとって自動詞表現を選択するところが難しい。

以下では、上の表に示された七つの先行研究を研究の対象、調査の手法という観点から分類することで研究の視点および調査手法の偏りを指摘し、今後このテーマに関する研究がどのように補充され、進展していくべきなのか、その方向を示したい³⁾。

3.1. 自動詞・他動詞の定義の不在

今回、先行研究として挙げた研究はいずれも対のある自動詞、他動詞を研究対象にしているが、研究対象の範囲や定義を明確に行っていないものが多い。その中には対のある自動詞、他動詞のみを扱うのか、対のないものも含むのかという情報さえ示していない場合もある。

今後は、調査対象となる自動詞、他動詞の範疇を明示し、教育現場での応用や追調査実施の際の混乱を避けなければならない。

3.2. 語彙的側面に着目した研究の不在

対のある自動詞、他動詞は文法項目であると同時に、それに含まれるそれぞれの動詞が独立した語彙として機能するという複数層の構造をなしている。このことから、対のある自動詞、他動詞の習得研究は、文法項目の習得研究という側面と同時に、語彙の習得研究という側面を持ち、その習得の様相は複雑なものであると考えられる。

今回、先行研究に挙げた七つの研究は対のある自動詞、他動詞を文法項目であると捉え、その文法項目の形態的、統語的、意味的特徴の習得を見ているものである。

そしてその結果、守屋(1994)、小林(1996)、小林・直井(1996)では、「自動詞の使用が困難である」という共通の見解が得られている。小林(1996)、小林・直井(1996)、都築(2001)⁴⁾ではさらに、自動詞表現の中でも、特に「働きかけの結果の状態を表す自動詞の運用が難しい」という指摘がなされている。

ここで、今までの研究ではどのような自他動詞対を扱っても、「自動詞」「他動詞」の習得を表す、とされていることに注意しなければならない。つまり、調査で扱われた動詞の実質的違い、あるいは性質の違い(例えばその動詞の意味の具体性、使用頻度など)は今までの研究においては分析の対象外であった。

これに対して、調査の際に語彙を制限しているという意味で、語彙の習得研究という側面を持つ研究として、小林(1996)、小林・直井(1996)の調査の一部がある。これらの調査では対象となる必須補語と動詞は「ドア」、「開く」、「開ける」、「開けられる」に限られている(補助資料参照)。

今後、調査対象となる語彙、あるいは語彙の特性を制限することで、自動詞、他動詞という全体像に紛れてしまっていた習得の様相をよりきめ細かく捉えることができる可能性があるのではないだろうか。

但し、語彙的側面を見るだけで、直ちに自動詞、他動詞の習得研究につなげることはできない。ある特定の動詞対を誘出した結果は、直接的にはその語彙の習得状況を示しているわけであって、それを即、自動詞、他動詞という文法項目の習得にまで一般化することはできないからである。自動詞、他動詞の範疇に含まれる一構成素としての、ある語彙の習得状況を切り取っただけでは、「自動詞」、「他動詞」の習得を測ることはならないのである。

そこで本稿では、対のある自動詞、他動詞に含まれる各語彙の習得研究というミクロのレベルと、その集合体である自動詞、他動詞という文法項目の習得研究というマクロのレベルを行き来する、複眼的視点を持って自動詞、他動詞の習得研究は行われていく必要があると結論づけたい。

現在行われている対のある自動詞、他動詞の習得研究はマクロのレベルである文法項目としての自動詞、他動詞の習得研究がほとんどであるので、今後はその語彙的側面に着目した研究が必要になるだろう。

3.3. 内省的手法の必要性

近年、言語処理の結果のみを見るテスト形式の調査に加えて、その問題解決過程を推測する手法として内省的手法を併用することの重要性が示されている(Färch & Kasper 1987, ネウストブニー2002など)。

日本語の自動詞、他動詞の習得研究で内省的手法が用いられた研究として、空欄補充テストの後でフォローアップインタビューを行った守屋(1994)、都築(2001)がある⁵⁾。また、西隈(2003)では、内省に主眼をおいた調査計画が取られており、その際には、学習者に文法性判断を行わせた直後にその判断の確信度を内省してもらうという手法が採用されている。その結果、学習者が正誤判断をする際に、確信度が低いのは自動詞を含む文であるという結果が出ている。この結果は、今まで産出結果をデータとした自他動詞の習得研究の結果を支持すると同時に、学習者言語のより複合的な捉え方を可能にしている点で興味深い。

学習者独自の言語メカニズムの解明を複合的に捉えることを目指し、今後は産出の結果を研究対象にするだけでなく、その産出過程や学習者の意識に迫ることができる内省的手法を用いた研究がさらに行われる必要があるだろう。

3.4. 運用データ収集の必要性

表で表されるように、今までに行われた日本語の自動詞、他動詞の習得に関する研究は、文法性判断テストや多肢選択法などのように、学習者の自動詞、他動詞に関する言語直観を推測するもの（守屋1994、小林1996、小林・直井1996、西隈2003など）に加えて、文完成法、翻訳法などのように、研究者によって制限された文脈において自動詞、他動詞を誘出するもの（小林1996、小林・直井1996、岡崎・張1998、都築2001など）があった。これらの研究から得られた結果は、学習者の言語知識を捉えているものであると考えられる。

言語知識と実際の自由な発話場面における運用とは別個のものとして考えられなければならない（Larsen-Freeman & Long 1991）ことから、今後は運用に目を向けた調査が必要になるだろう。その際、より自然な発話であることが望ましいが、調査対象となる項目が出現しないと意味がないので、話題をコントロールして引き出すという手法が取られることになるだろう。

第4節 まとめ

本研究では、日本語学習者による対のある自動詞、他動詞の習得に関する先行研究を概観し、研究の対象、調査の手法の観点から分類することで研究の視点および調査手法の偏りがあることを指摘した。

そして、その結果から今後このテーマに関する研究がどのように補充され、進展していくべきか、発展の方向を示した。今回の分析の結果は、以下の四点にまとめられる。

- 1) 調査の際は、調査対象となる自動詞、他動詞の範疇を明示する必要がある。
- 2) 対のある自動詞、他動詞の習得に関する研究では今後、その語彙的側面に着目した研究も必要になる。
- 3) 産出の結果のみを研究対象にするのではなく、その産出過程や学習者の意識に迫る内省の手法を用いた研究がさらに行われる必要がある。
- 4) 運用に目を向けた調査が今後必要になる。その際、より自然な発話であることが望ましい。

今後、以上のような観点を持った研究が行われ、日本語学習者による対のある自動詞、他動詞の習得がどのような様相をなすのかを複合的な観点を持って明らかにすることが期待される。

【注】

- 1) なぜ非文になるのかについては、影山（1996）で論じられている。
- 2) 須賀・早津（1995：229）も「動詞語形に自他の対応があるという語のレベルの問題と、自動詞文と他動詞文が『構文的な対応』を持つという文のレベルの問題があることに注意しなければならない」と指摘している。
- 3) ネウストプニー（2002）でも、ある研究テーマについて調査するにはどの方法論も単独では理想的とは言えないので、欠点を補うように複数の方法を取ることが望ましい、とされる。
- 4) 都築（2001）では、中国語話者やその他の母語話者において、「*このカバン、たくさん物が入れそう（→入りそう）だね」のように、自動詞の可能形と辞書形の誤用がよく見られると指摘されている。この現象に関して文法研究の分野においては、「結果可能」を表す自動詞表現として張（1994a, 1994b, 1997）に詳しいが、この「結果可能」を表す自動詞表現は、「有対自動詞はそれに対応する他動詞の表す動作によって引き起こされる状態変化を表すものであり、有対自動詞のこのような意味上の性格は、動作主の意図した状態変化の実現を動作がなされた結果の視点から取り上げる結果可能表現の文法的性格との間にかかなりの共通性が見られる」（張1997：95-96）と指摘されるように、結果の状態を表す自動詞表現と近似した用法であると考えられる。つまり、都築（2001）の指摘もまた、小林（1996）、小林・直井（1996）と見解の一致を見ていると言えるだろう。
- 5) この他に、発話データを産出する際の自己修正を調査対象とした田中（1999）、自他動詞の困難点を学習者にインタビューした岡崎・張（1998）がある。

【引用文献】

- 市川保子編（1997）『日本語誤用辞典』凡人社
 岩崎典子（1999）「第二言語としての日本語話者の文法知識と運用—いわゆる二項動詞と助詞『を』『に』をめぐって」第10回第二言語習得研究会全国大会大会プログラム、pp.68-76.
 岡崎智己・張建華（1998）「中国語話者の日本語学習時における自動詞・他動詞の使用に関する分析」『九州大学留学生センター紀要』、9、pp.19-38. 九州

- 大学留学生センター
 奥津敬一郎 (1967) 「自動化他動化および両極化転形」
 『国語学』70, pp.46-66. 国語学会
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論－言語と認知の接点－』
 くろしお出版
- 久野由宇子 (1989) 「初級教材における自動詞と他動
 詞の提出のしかた」『文化外国語専門学校日本語紀
 要』2, pp.54-79. 文化外国語専門学校
- 小林典子 (1996) 「相対自動詞による結果・状態の表
 現－日本語学習者の習得状況－」『文藝言語研究言
 語篇』29, pp.41-56. 筑波大学文藝言語学系
- 小林典子・直井恵理子 (1996) 「相対自・他動詞の習
 得は可能か－スペイン語話者の場合－」『筑波大学
 留学生センター日本語教育論集』11, pp.83-98. 筑波
 大学留学生センター
- 佐久間鼎 (1936) 『現代日本語の表現と語法』pp.114-
 138. 厚生閣 (くろしお出版より1983年復刊)
- 迫田久美子 (1998) 『中間言語研究－日本語学習者
 による指示詞コ・ソ・アの習得－』漢水社
- 須賀一好・早津恵美子編 (1995) 『日本語研究資料集
 第1期第8巻 動詞の自他』ひつじ書房
- 田中真理 (1999) 「OPI に現れた受身表現について：
 日本語教育とコミュニケーションの観点から」『第
 2言語としての日本語の習得に関する総合研究』
 (平成8年度～平成10年度科学研究費補助金研究成
 果報告書基盤研究(a)(1)課題番号08308019研究代表者
 カッケンブッシュ寛子) pp.351-378.
- 張威 (1994a) 「統語上にみられる結果可能表現の成
 立条件 (上)」『日本語学』13-11, pp.93-103. 明治
 出版
- (1994b) 「統語上にみられる結果可能表現の
 成立条件 (下)」『日本語学』13-12, pp.71-78. 明
 治出版
- (1997) 『結果可能表現の研究－日本語・中国
 語対照研究の立場から－』くろしお出版
- 都築順子 (2001) 『『このカバン、たくさん物がいれ
 そうだね。』の誤用に関する一考察』平成13年度第
 1回日本語教育学会研究集会発表資料
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』く
 ろしお出版
- 長沢房枝 (1995) 「L1, L2, バイリンガルの日本
 語文法能力」『日本語教育』86, pp.173-189. 日本語
 教育学会
- 西尾寅弥 (1978) 「自動詞と他動詞における意味用法
 の対応について」『国語と国文学』55-5, pp.173-186.
 ——— (1982) 「自動詞と他動詞－対応するものとし
 ないもの－」『日本語教育』47, pp.57-68. 日本語
 教育学会
- 西隈俊哉 (2003) 「日本語の自動詞・他動詞の文法性
 判断に関する一考察－確信度スケールを用いて－」
 平成15年度日本語教育学会第1回研究集会予稿集
 ネウストブニー J. V. (2002) 「第1章 総論」ネウ
 ストブニー J. V.・宮崎里司編『言語研究の方法』
 くろしお出版
- 早津恵美子 (1987a) 「対応する他動詞のある自動詞
 の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6, pp.79-
 109. 京都大学言語学研究会
- (1987b) 『他動詞と自動詞の対応について』
 1986年度東京外国語大学外国語学研究所修士論文
- (1989a) 「有対自動詞と無対他動詞の違いに
 ついて－意味的な特徴を中心に－」『言語研究』95,
 pp.231-256.
- (1989b) 「有対自動詞と無対他動詞の意味上
 の分布」『計量国語学』16-8, pp.353-363.
- 松本恭子 (1999) 「ある中国人児童の動詞形態素習得－
 来日2年間の縦断調査報告と動詞指導のポイント－」
 第10回第二言語習得研究会全国大会大会プログラム
- 本居春庭 (1828) 『詞の通路』
- 守屋三千代 (1994) 「日本語の自動詞・他動詞の選択
 条件－習得状況の分析を参考に－」『講座日本語教
 育』29, pp.151-165. 早稲田大学日本語研究センター
- 山田孝雄 (1922) 『日本文法講義』宝文館
- Corder, P. (1967) The significance of learner's errors.
International Review of Applied Linguistics, 5, pp.161-
 169.
- Færch, C. & Kasper, G. (1987). From Product to
 Process-Introspective Methods in Second Language
 Research. In C. Færch & G. Kasper, Eds. *Intro-
 spection in Second Language Research*, pp.5-23.
 Clevedon, England: Multilingual Matters.
- Hirakawa, M. (2001) L2 Acquisition of Japanese
 Unaccusative Verbs. *Studies in Second Language
 Acquisition*, 23, 2, pp.221-245.
- Larsen-Freeman, D. & Long, M. (1991) *An Introduction
 to Second Language Acquisition: Research*. New
 York: Longman.
- Selinker, L. (1972) Interlanguage. *International Review
 of Applied Linguistics*, 10, 3, pp.209-231.

【参考資料】

Japanese vol.2 Notes』凡人社

文化外国語専門学校 (2000)『新文化初級日本語II』

凡人社

スリーエーネットワーク (1998)『みんなの日本語初

級II本冊』スリーエーネットワーク

(主任指導教官 迫田久美子)

筑波ランゲージグループ (1992)『Situational Functional

表2

[補助資料]

小林 (1996) より

あなただったら、何と言いますか。一番自然な言い方を選んでください。

1. 部屋に入ろうと思ったのですが、部屋の鍵が見つかりません。鍵をなくしてしまったようです。

「困ったなあ、

1) ドアがあかない。

2) ドアをあけない。

3) ドアがあげられない。」

2. そこで、針金を鍵穴に入れて、開けようとしたのですが、なかなか

1) あきません。

2) あげません。

3) あげられません。

3. それを見た隣の人が「どうしたんですか」と聞きました。それで、答えました。

「実は、鍵をなくしたので、

1) ドアがあかないんです。

2) ドアをあけないんです。

3) ドアがあげられないんです。」

4. 隣の人が「鍵ならありますよ。ここに落ちていました。これですか」と鍵を見せました。

「ええ、そうです。」(ガチャガチャと鍵を鍵穴に入れる)

「ああ、

1) あけた。

2) あいた。

3) あけられた。」